The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本最初期英語研究書の依拠資料と編集
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2017, 51, p. 21-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71412
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本最初期英語研究書の依拠資料と編集

田野村　忠温

キーワード：『諳厄利亜言語和解』／『諳厄利亜興学小筌』／『諳厄利亜語林大成』／英語学史／英学史

1．はじめに

日本人の英語との接触および英語学習の初期の歴史については詳細な研究の蓄積があり、さらに解明し得る重要なことはもはや残っていないのではないかと思わせるほどである。しかし、早くからさまざまに論じられてきたにもかかわらず、今なお満足な理解の得られていない問題が1つある。それは、日本人による英語学習の最初期における関係の著作がどのようにして作り出されたのか、すなわち、何を依拠資料とし、どのような編集を経て成立したのかという問題である。

欧州で出版された特定の語学書が依拠資料であったという想像を述べることは容易であるが、それを証明しようとすれば過去においては欧州の各地にわずかに残存する歴史的な資料を探し出し、現地に赴いて閲覧するしかなかった。しかし、今や資料画像のインターネット公開の普及その他により、調査を格段に容易に行えるようになった。この小論は、現代のそうした利を生かして上記の問題の解明を図るものである。

2．対象とする英語研究書およびその依拠資料に関する諸説

定説として語り継がれるところによれば、日本人の英語との接触は、1600（慶長5）年における英国人ウィリアム・アダムズ（William Adams、後の日

本名三浦按針）らを乗せたオランダ船リーフデ号の漂着に始まる。しかし、日本人が英語の学習に取り組んだことを成果物の形で確かめ得るのはその2世紀後、19世紀初頭のことである。相次ぐ外国船の来航を受けて、幕府よりオランダ通詞に対してフランス語、ロシア語、英語の学習の命が下された。それを受けて当時著された英語関係の著作がこの小論の考察の対象である。

2.1　対象とする英語研究書

具体的には、ここでは19世紀初期の短期間に著された次の3件の英語研究書を取り上げる。

1）『諳厄利亜言語和解（アンゲリア　わげ）』（1810～1811（文化7～8）年）
2）『諳厄利亜興学小筌』（1811（文化8）年）
3）『諳厄利亜語林大成』（1814（文化11）年）

「諳厄利亜」は英国を表すラテン語名Angliaの音訳であり、入華イタリア人カトリック宣教師マテオ・リッチ（Matteo Ricci、中国名利瑪竇）の『坤輿万国全図』（1602（万暦30）年）で使われている。日本では18世紀から19世紀前半にかけての文献にその使用が見出され、その後「英吉利」「エゲレス」「イギリス」などの名称の普及に伴って消滅した。

いずれの研究書も名前が「諳厄利亜」で始まり、かつ、長いので、以後原則としてその共通部分は省いて『言語和解』『興学小筌』『語林大成』として言及する。なお、関連の漢字表記の読みは必ずしも現代のそれに一致しない。当時にあっては「言語」の読みはゴンゴないしゲンギョであり、「諳厄利亜語」の「語」は文脈によってはコトバとも読まれた可能性がある。

3件の英語研究書の内容や成立背景についてはすでに繰り返し語られており、後の各節でも論述上必要な範囲において述べる。ここには最低限のことだけを記せば、すべて上述の経緯で英語学習の幕命を受けたオランダ通詞たちが著したものであった。そして、いずれも出版されることはなく、写本の

形で限定的に流通しただけであった。

研究者間で一致した見解の通り、どの研究書も基本的に英語とオランダ語の対訳の形式の語学書を利用し、そのオランダ語の部分を日本語に訳すという方法で作られている。各研究書の作者が英語を十分に習得、理解したうえで執筆したわけでもない。したがって、現代的な意味における英語の研究書とは性質が大きく異なる。しかしながら、未知の外国語である英語に初めて取り組み、辞書や会話文例集を作り出した先駆的な試みであるという意味において、日本人による最初の英語研究書と形容しても過大評価には当たらないであろう。

渡辺（1959, 1982）はこれらの研究書をオランダの語学書の単なる日本語訳と見て努めて軽く評価しようとしている。しかし、原本との関係に関するしかるべき理解を前提として言えば、想像に頼った渡辺の発言は一面的と評せざるを得ない。なぜならば、研究書の作者たちはただ原書のオランダ語を日本語に置き換えたのではなく、原書――研究書によっては複数の原書――の内容を取捨、再構成し、要素の追加や並べ替え、記述の調整や誤りの訂正、ときには内容の改変まで行っているからである。また、作者たちはすべての英語の語句や文例に対して不正確ながらもその発音の仮名表記を加えており、その作業はオランダ語の翻訳とは別次元に属する。

現在内容を部分的にしか確かめられない『言語和解』は別として、『興学小筌』と取り分け『語林大成』は多大な労力を費やして作られていることが原本との対照から知られる。渡辺は、英語の分からない幕府の側からすればオランダ通詞に「目に見える形の成果報告の如きものを欲した」、そして、「『興学小筌』は、まさにその研究成果報告に他ならなかった」と言う。幕府の意向が単なる学習事実の確認であったかどうか筆者には判断できないが、たとえそうであったとしても、『興学小筌』や『語林大成』をただその意向に応じるという意識で著されたものと見てよいかと言えばそれは疑わしい。そのようなものでよければ同様の見かけのものを作れるはるかに容易な方法があり得たはずだからである。

2.2　依拠資料に関する諸説

英語研究書3件の依拠資料に関する従来の諸説に本小論の見解を加え、それらを比較しやすい形にまとめれば表1のようになる。研究が全体として、想像に頼った立論から、資料の調査に基づく実証的な考察の段階に進んできたと言うことができる。

従来の個々の説に関する検討はここでは省略に従う。早い時期の説はいずれも想像の域を出ないために事実からの乖離がしばしば大きく、それを一々検討する意味も乏しいからである。近年の研究には後の議論の中で触れる。

以下の各節においては、それぞれの英語研究書について、その素材――すなわち、英語の語彙と文例――がどこから取られ、そして、それがどのように再配置、再構成されたかを考察する。研究書の編集にはさらに英語表現に対する日本語訳と発音表記の付与の側面があるが、それらは本小論の関心の対象外とする。

３.『諳厄利亜言語和解』

『諳厄利亜言語和解』はかつて東京帝国大学図書館にあったが、関東大震災（1923（大正12）年）で焼失した。しかし、幸いなことに、勝俣（1936）に収められた焼失数か月前の閲覧の精密な記録を通じて我々はその概要と内容の一端を知ることができる。

3.1　『言語和解』の概要と内容の一部

勝俣によれば、『言語和解』は3巻から成っていた。巻尾に吉雄権之助（ごんのすけ）の名の記された第一巻は、「天気・逍遥・時刻・通語・思慮・言辞・作為の七部門から成り、各部に対話があり、各頁八行の割合で英と和と交互に記され」ていた。巻末に猪俣伝次右衛門の名の記された第二巻は、「面晤･知識･来往･礼譲・誓約・問齢の六部門から成」る対話であった。そして、岩瀬弥十郎の

表1　『言語和解』『興学小筌』『語林大成』の依拠資料に関する諸説

	『諳厄利亜言語和解』1810～1811年	『諳厄利亜興学小筌』1811年		『諳厄利亜語林大成』1814年
		「類語大凡」	「平用成語」「学語集成」	
新村(1922)				“『興学小筌』を大成したものである。”
竹村(1933, 1934)				“英蘭辞典の和蘭語を削り、それに当時流布していた『波留麻和解』『訳鍵』等の蘭和辞典中の和訳を挿入し、或は参考にして成ったものであることは疑う余地がない。”
岩崎(1941)	“原著に就いては未だ手懸りを獲ていない。”	“原著は1760年の刊行にかかる蘭文英語法書W. Sewel *A Compendious Guide to the English Language*と想像する。”		“底本はW. Sewel *A Compleat Dictionary English and Dutch,* 1766に外ならなかったと推定する。”
渡辺(1967, 1982)		“原本はPieter MarinなりVan der Pylなりの*Gemeenzame Leerwys*のような豊富な単語部と豊富な会話部とを有する英蘭対訳語学入門書に違いない。『興学小筌』ではそこから理解し易い部分だけを抄訳し、『語林大成』ではそこに現れる英単語を漏れなく拾い、アルファベット順に配列した。『語林大成』ではW. Sewel *A Large Dictionary, English and Dutch,* 1746も参考にした可能性が高い。”		
杉本(1978, 1981)		“P. マーリンの著に拠る『払郎察辞範』の草稿がすでに成立していて、それを一の下敷にしたのではあるまいか。”		“W. Sewel *A Compleat Dictionary English and Dutch,* 1766から必要性の高い単語を選んだ。原書翻訳のような必要もないので、文例や分詞形は省いた。”
井田(1982a, 1982b)		“底本は「主題別類語集＋日常用語集＋会話文集」という形態の学習書、*Gemeenzame Leerwys*風の蘭英対訳語学書であった確率が甚だ高い。”		“複数の底本の併用ないし折衷という方向に関心をむけている。本木らが使用した辞書の研究も必要であろう。”
南出(1991)		“原典を参照していないので確かなことは言えないが、岩崎(1941)の挙げるW. Sewel *A Compendious Guide to the English Language,* 1760が共通の底本であろうと推測される。”		
山口(1996a, 1996b)			“W. Sewel *A Compendious Guide to the English Language*の1724年版か1735年版が限りなく近い。”	※左記は神沢(2007)における引用による。
神沢(2007, 2011, 2015)			“W. Sewel *A Compendious Guide to the English Language*の1724年版。ただし、他にもっと似ているものがあることも考えられる。”	“W. Sewel *A Compendious Guide to the English Language*の1705年版あるいは1706年版の第3部の語彙集に英蘭辞典から語句を適宜取り出して増補した可能性がある。”
松田(2017)			“「学語集成」の底本はW. Sewel *A Compendious Guide to the Low-Dutch/Eng. Lang.*の1700年より後、1740年より前の版種。1705年版か。”	“底本にはW. Sewel *A Compendious Guide to the Low-Dutch Language,* 1760の第3部が使用されたようである。そのアルファベット順の英蘭語彙集を大幅に増補する方法が採用された。”
本小論	E. Evans *A New Complete English and Dutch Grammar*の第2版(1778)か第3版(1792)	E. Evans *A New Complete English and Dutch Grammar*の第3版(1792)	W. Sewel *A Compendious Guide to the Low-Dutch Language*の1725年版またはW. Sewel *A Compendious Guide to the English Language*の1724年版	1) W. Sewel *A Compendious Guide to the Low-Dutch/English Language*の1740年までの版 2) E. Evans *A New Complete English and Dutch Grammar*の第3版(1792) 3)『諳厄利亜興学小筌』全体(語彙集＋文例集)

名の記された第三巻は語彙集で、「A creatureに始まり、A physicianに終つてゐた」。

勝俣は第一巻の「天気」の部門に収められていた文例47件を紹介している。その最初と最後の文例数件ずつを示せば次の通りである。

ホウ イス デ ウェードル
How is the weather? 天気は如何なるか。
ウァツト ウェードル イズ イット
What weather is it? 如何なる天気ぞ。
ウェリ グード
It is very good weather. 好き天気なり。
フアイン
It is fine weather. 麗なる天気なり。
ドラースンド ブロウ アット ヲール
It does'nt blow at all. 少しも風吹事なし。
クウェイト カーム
It is quite calm. 全く静なり。

（中略）

スノウス
it snows. 雪の降る。
ギリート フレッキス
it snows in great flakes. 雪大なる花をなして降る。
メルト
the sun will melt the snow. 日雪を融す。
レイテンス
it lightens. 電す。[1)]
ダット ウァス エ テリブル カラップ ヲフ ツンドル
that was a terrible clap of thunder. 甚恐ろしき雷鳴なりき。
デール ギリート ミスト
there is a great mist. 彼処に甚しき霞あり。

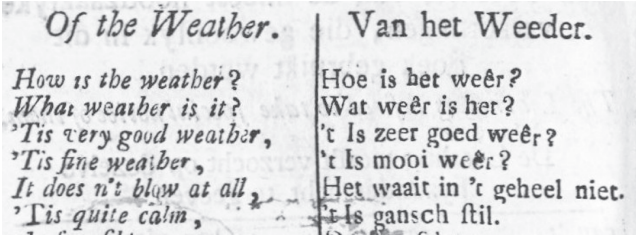
3.2 『言語和解』の依拠資料と編集

『言語和解』の依拠資料は従来論じられたことがない。岩崎（1941）が「原著に就いては未だ手懸りを獲てゐない」と記しているだけである。[稿末追記1] 新村（1922）は想像に頼って『言語和解』は『興学小筌』の前稿であろうと述べているが、両書は互いに独立した著作である。

筆者の調査によれば、『言語和解』第一巻と第二巻の会話文例集は、オランダ人のための英語学習書であるEdward Evans *A New Complete English and Dutch Grammar*（オランダ語の書名*Nieuwe en Volkomene Engelsche en Nederduitsche Spraakkonst*）の第2部'Second Part of the English and Dutch Grammar'に含まれ

る英蘭対訳の会話文例集‘Familiar Phrases’を出典とする。同書には4つの版――1757年刊の初版、1778年刊の第2版、1792年刊の第3版、1806年刊の第4版――がある。[2)]

第3版の文例集の開始部分を示した図1に見る通り、『言語和解』の英語の文例は同書のそれにほぼ完全に一致する。



Of the Weather.	Van het Weeder.
How is the weather?	Hoe is het weêr?
What weather is it?	Wat weêr is het?
'Tis very good weather,	't Is zeer goed weêr?
'Tis fine weather,	't Is mooi weêr?
It does n't blow at all,	Het waait in 't geheel niet.
'Tis quite calm,	't Is gansch ſtil.

図1　Evans ‘Familiar Phrases’の開始部分

『言語和解』の文例を確かめられるのは第一巻の「天気」――Evansの文例集では‘Of the weather’――だけであるが、それに続く部門もEvansの部門にそのまま対応している。その様子は表2の通りである。

表2　Evans ‘Familiar Phrases’と『言語和解』文例集の部門の対応

E. Evans *A New Complete English and Dutch Grammar,* ‘Familiar phrases’	『諳厄利亜言語和解』文例集	
Of the weather	第一巻	天気
Of going a walking		逍遥
Concerning the time of day		時刻
Of understanding a language, &c.		通語
Of thinking		思慮
Of speaking		言辞
Of doing		作為
Of seeing a person, or thing	第二巻	面晤
Of knowing, or being acquainted, &c.		知識
Of coming, going, &c.		来往
Of complimenting		礼譲
To affirm		誓約
To enquire about a person's age		問齢

Evansの文例集においては、これらの後にさらに‘Of hearing, and enquiring about news, &c.’、‘Of dressing one self, paying a visit, &c.’、‘Enquiring, searching

after, finding, &c.' の3部門が続くが、『言語和解』ではそれらは省かれている。

Evansの文例集の'Of the weather'と『言語和解』の「天気」を比較すると、前者にあった文例の一部が後者では省かれていることを除くと、文例もその提示順も一致する。図1に示した範囲で見られる違いは、原文における'Tisとdoes n't(ママ)が勝俣の記録ではIt is、does'ntになっていることだけである。後者は『言語和解』の作者か勝俣の誤写であろう。代名詞itに関わる前者の変更については後に触れる。文例47件を通して見ても文字単位の誤写が加わるだけである。『言語和解』では、少なくとも「天気」に関する限り、一部の文例の省略、itの表記の変更、日本語訳と発音表記の付与以外には何らの編集も行われていないことになる。

『言語和解』第三巻の語彙集については、「A creatureに始まり、A physicianに終」わるということしか分からない。しかし、Evansの語学書の第2部'Second Part of the English and Dutch Grammar'に含まれる英蘭対訳の意味分野別の語彙集'A Vocabulary, English and Dutch'に挙げられた語句は現にa creatureで始まる。したがって、文例集と同じく語彙集も同書に基づいて作られた可能性は十分にある。

3.3　依拠資料の版

『言語和解』の内容は断片的にしか確かめられないことから、依拠資料として使われたEvans *A New Complete English and Dutch Grammar*の版を解明しようにも限界がある。

確実に言えるのは、『言語和解』の文例集はEvansの語学書の第2版以後の版によっているということである。初版は文例集'Familiar Phrases'の構成や内容が後の各版と大きく異なる。例えば、開始部には部門名がなく、最初の文例は'I wonder you(ママ) did not come to see me.'である。

しかし、依拠資料の版をそれ以上限定することはむずかしい。かろうじて版の考察に役立つ可能性があるのは次の文例である。

the clouds begins（ベキンス） to disappear.　雲の消かゝる。

第2版と第3版ではこの誤った英文の通りに印刷されているが――文頭は大文字で書かれている――、第4版ではbeginsがbeginに訂正されている。『言語和解』の作者が原文を忠実に書き写しているとすれば、依拠資料として使われたのは1778年刊の第2版か1792年刊の第3版のいずれかであることになる。[3] そして、今言えるのはそこまでである。

代名詞itに関わる表記の変更は依拠資料の版の検討の有効な材料にならない。Evansの語学書におけるitの縮約形の出現はbe動詞かwill、wouldの直前の位置に限られる。ところが、『言語和解』では次のようにitを一般動詞の前で縮約した文例が「天気」の部門だけで6件もある。

’t begins（ベギンス） to（ト） rain.　雨の降り出す。

『言語和解』の作者はit縮約の条件を認識せず、オランダ語の同綴の代名詞からの類推によって原文における縮約の有無を随意に変更したものと見られる。実際、Evansの語学書と『言語和解』の文例におけるit isの表記―― it is、’t is、’tis ――の対応も無秩序である。

４．『諳厄利亜興学小筌』

『諳厄利亜興学小筌』と次節で取り上げる『諳厄利亜語林大成』はいずれも少数の稿本や写本の形で現在に伝わっている。そして、作者自身による稿本、写本が日本英学資料刊行会によって複製、刊行されており（大修館書店、1982年）、その内容に容易に接することができる。ここでの調査にも基本的にその影印本を用い、論述上重要な箇所のみ長崎歴史文化博物館蔵の原本によって確認した。

4.1 『興学小筌』の概要

『興学小筌』は10巻から成り、「類語大凡」（巻之一～巻之三）、「平用成語」（巻之四～巻之五）、「学語集成」（巻之六～巻之十）の3つの部分で構成されている。「類語大凡」は英和対訳の意味分野別の語彙集、「平用成語」と「学語集成」はともに英和対訳の会話文例集である。「平用成語」と「学語集成」のあいだには依拠資料や編集を考えるうえで実質的な違いはないので、両者を一括して扱う。

『興学小筌』の凡例の末尾には本木正栄（まさひで）（庄左衛門）の名が記されている。実際には後に見る『語林大成』と同じく本木を代表とするオランダ通詞たちによる共同執筆であったと想像されるが、同書にそれを確認できる記述はないので、本木個人の著作として扱う。

4.2 「類語大凡」の依拠資料と編集

「類語大凡」は名目上「乾坤部」「時候部」「数量部」「官位人倫人事部」「支体部」「気形部」「器材部」「服食部」「生植部」「言辞部」という10の部門に分けられている。これは槙島昭武（てるたけ）編『和漢音釈書言字考節用集』（1717（享保2）年）の部門分けに非常に近いことが井田（1971）によって指摘されている。ただし、大半の部門はさらに互いに空行で隔てられた複数の下位部門に分けられており――例えば、「気形部」の語句は動物、虫、魚、鳥の4類に分けて挙げられている――、事実上の部門の数は30に上る。

この語彙集がどのようにして作られたのか。結論から述べれば、本木は『言語和解』の出典としても使われたEdward Evans *A New Complete English and Dutch Grammar*を使い、その第2部‘Second Part of the English and Dutch Grammar’に含まれる英蘭対訳の類別語彙集‘A Vocabulary, English and Dutch’――3.2の最後に触れたもの――に挙げられた語句を上述の30の部門に分配するという方法で「類語大凡」を編んだ。[5] 本木が独自に増補した語句も若干あるが、大多数の語句はEvansの語彙集から取られている。そして、粗い見

積もりによれば、語彙集の語句の6割強程度が「類語大凡」に収められているものと見られる。

「類語大凡」の個々の部門、下位部門の内容がEvansの語彙集の主にどこから取られているかを整理すると次頁以下の表3のようになる。Evansの部門名についてはしばしば冒頭に置かれた‘Of’を省くなど、表記を一部調整している。

「類語大凡」の語句がEvansの語彙集から取られていることは確実でも、一見不可解な事実がある。それは、「類語大凡」における語句の排列順はEvansの語彙集におけるそれとしばしば異なり、しかも、その変化にしかるべき理由を見出しがたい場合が多いということである。

例えば、図2と図3は両書の食品を表す語句の部門においてbreadとその関連表現が挙げられた箇所である（それぞれEvansの語学書第3版の158頁、『興学小筌』巻之三の18a[6]）。「類語大凡」では語句が半葉に6行、各行に2項目の体裁で記されている。

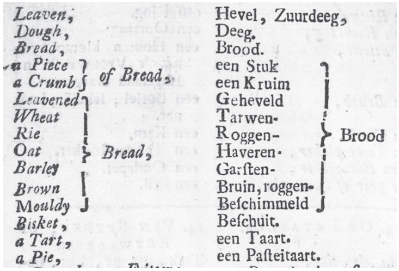

Leaven, Hevel, Zuurdeeg,
Dough, Deeg.
Bread, Brood.
a Piece } of Bread, een Stuk
a Crumb } of Bread, een Kruim
Leavened } Bread, Geheveld
Wheat } Bread, Tarwen-
Rie } Bread, Roggen-
Oat } Bread, Haveren-
Barley } Bread, Garsten-
Brown } Bread, Bruin, roggen-
Mouldy } Bread, Beschimmeld
Bisket, Beschuit.
a Tart, een Taart.
a Pie, een Pasteitaart.

図2　Evans語彙集のbread関連表現

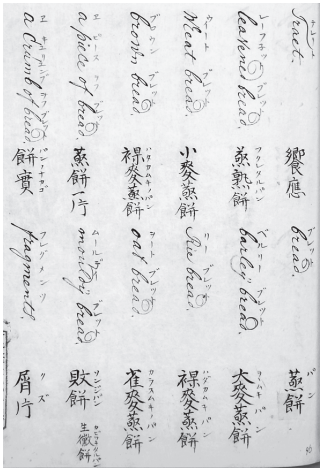

Fract. 饗應 bread. 蒸餅
leavened bread. 蒸熟餅 barley bread. 大麥蒸餅
Wheat bread. 小麥蒸餅 Rue bread. 裸麥蒸餅
brown bread. 裸麥蒸餅 oat bread. 雀麥蒸餅
a piece of bread. 蒸餅一片 mouldy bread. 敗餅 生黴餅
a Crumb of bread. 餅實 fragments. 屑片

図3　『興学小筌』「類語大凡」のbread関連表現

表3　「類語大凡」とEvans語彙集の部門の対応

『諳厄利亜興学小筌』「類語大凡」			E. Evans *A New Complete English and Dutch Grammar,* 'A Vocabulary, English and Dutch'
巻之一	乾坤部	「heaven 天」～	1. Created beings, 2. Heaven, 3. The fire, 4. The air, 5. The water, 6. The earth, 18. The outward senses and their objects, 32. Tradesmen and their tools, &c., 34. Fossils and minerals, 35. Stones, 36. Precious stones, 37. Metals, 45. Barren trees, 73. Husbandry, 77. Time [+ 'Familiar phrases'の'Concerning the time of day']
		「the border 国界」～	1. Created beings, 5. The water, 65. A city, 66. Parts of a house, 67. The rooms of a house, &c., 76. A college, 80. Ecclesiastical persons and places, 83. Military persons, 87. Measures of length
		「Europe 欧羅巴」～	94. Countries, &c.
	時候部	（非分割）	77. Time
	数量部	「one 一」～	88. The cardinal numbers
		「the first 一番」～	89. The ordinal numbers
		「once 一度」～	90. Adverbial numbers
		「first 第一」～	91. Adverbial numbers of order
		「single 一重」～	92. Multiplicative numbers
巻之二	官位人倫人事部	「emperor 大王」～	22. Capital crimes, 24. The diversity of conditions, 25. The diversity of ranks, 26. The officers of state, 27. The forms of government, ensigns of honour, 28. A court of justice, 29. The magistrates of a borough, &c., 30. The servants of a nobleman, 31. Women servants, 32. Tradesmen and their tools, &c., 33. Arts, sciences, professions, &c., 80. Ecclesiastical persons and places, 81. Shipping, 82. Warfare, 83. Military persons
		「dancing master 踊戯師」～	17. The accidents of the body, 23. By such vices and crimes a person becomes, 24. The diversity of conditions, 31. Women servants, 32. Tradesmen and their tools, &c., 84. Merchandise
		「science 学」～	33. Arts, sciences, professions, &c.
		「ancestors 始祖」～	7. Man, 8. Kindred, 9. Affinity

	支体部	「head 頭」～	10. The parts of man's body, 11. The inward parts
		「the sense of hearing 聴」～	14. Eatables, 15. Drink, 16. Diseases, 17. The accidents of the body, 18. The outward senses and their objects
	気形部	「living creature 生畜」～	58. Beasts, 59. Whole-footed beasts, 60. Cloven-footed beasts, 61. Clawed beasts, 62. Rapacious clawed beasts, 64. Parts of beasts
		「insects 虫」～	48. Animals, insects, &c., 63. Oviparous beasts
		「fish 魚」～	49. Fishes, 50. River fishes, 51. Shell-fishes, 52. The parts of fishes, 63. Oviparous beasts
		「bird 鳥」～	53. Birds, 54. Birds feeding on vegetables, 55. Insectivorous birds, 56. Aquatic birds, 57. Parts of birds, 61. Clawed beasts, 63. Oviparous beasts
巻之三	器材部	「household furniture 家具」～	3. The fire, 13. Women's apparel, 32. Tradesmen and their tools, &c., 68. Household furniture, 69. Kitchen furniture, 75. A school, &c.
		「needle 鍼」～	13. Women's apparel, 32. Tradesmen and their tools, &c., 70. Brewing vessels, &c., 71. Instruments of cloth making and sorts of cloth
		「timber 材木」～	32. Tradesmen and their tools, &c., 45. Barren trees, 66. Parts of a house, 67. The rooms of a house, &c., 68. Household furniture, 69. Kitchen furniture, 74. A mill, &c.
		「coach 車」～	12. Apparel, 72. Horse furniture and things relating to travelling, 82. Warfare
		「ship 舶」～	77. Time, 81. Shipping
		「new year's gift 年賀礼物」～	78. Diversion, 79. Musical instruments
	服食部	「apparel 衣服」～	12. Apparel, 13. Women's apparel
		「eatables 食剤」～	14. Eatables, 15. Drink, 18. The outward senses and their objects
	生植部	「tree 木」～	44. Fruit trees, 45. Barren trees, 46. Fruits, 47. Parts of plants
		「herb 薬草」～	38. Plants and herbs, 39. Pot herbs, 40. Roots, 41. Physical herbs and flowers, 42. Imperfect herbs, 43. Shrubs, 46. Fruits, 47. Parts of plants
	言辞部	（非分割）	18. The outward senses and their objects, 19. The faculties of the soul, 20. Virtues, 21. Vices, 98. A collection of the most common adjectives, &c.

両書における語句の排列順の関係を見やすい形で示せば図4のようになる。英語以外の要素は省き、英字は小文字に統一する。

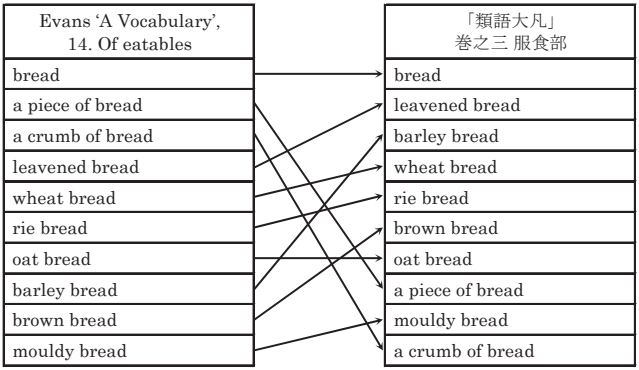


図4　Evans語彙集と「類語大凡」におけるbread関連表現の排列順の関係

Evansの語彙集では'bread'、'a ～ of bread'、'～ bread'という表現型の順に語句が並べられているが、「類語大凡」では語句が根拠不詳の順に並んでいる。しかし、転写時に語句の順序を変えるべき理由を想像しがたく、また、もしそのようなことをすれば語句の脱落や重複の危険も高まるはずである。Evansの語彙集における横書きの記述を「類語大凡」における縦書き2段の体裁に移し替える際に順序が入れ替わる可能性を考えてみても、図4に見るような変化を生じる具体的なプロセスは見出しがたい。

しかし、「類語大凡」全体における語句の排列順を観察することによって真相が見えてくる。それは、「類語大凡」がどのような方法で編集されたかということに密接に関わっている。すなわち、本木は「類語大凡」の編集に際し、まずEvansの語彙集の各部門の語句を1件ずつ紙片に書き取った。次に、それを「類語大凡」の部門に従って再分類し、そして、排列を調整した。多数の紙片を広い平面上に並べるなどの方法によって行われたであろうその作業の中で、Evansの記述の順に書き取った紙片もしばしば必要の範囲を超えて順序が入れ替わり、その結果として図4に見るような語句の排列順の複雑な対応が生じた。それは必ずしも語句の意図的な並べ替えの結果ではなく、

単に順序が変わったということであった。

この推定は単なる想像ではない。注目すべきことに、Evansの語彙集における語句の排列順が「類語大凡」で不規則に変化している中で、例外的に排列順が保存されている場合がある。それは、Evansの語彙集において複数の類義語が‘A, or B’、‘A, B, or C’のような見出しの1項目にまとめて掲げられている場合である。「類語大凡」はそのような場合AとB（およびC）の2（ないし3）項目に分けて語句を示している。例えば、Evansの‘gentle wind, or breeze’の項目（‘4. Of the air’）は「類語大凡」では「gentle wind 微風 和風」「breeze 微風」の2項目として挙げられている（巻之一、7b～8a）。このような事例においては、「類語大凡」の各項目はほぼ確実に隣接して、かつ、その順に並べられているのである。これは、当該の2件、3件の語句が同一の紙片に書き取られたと考えることで説明が付く。[稿末追記2]

中にはEvansの語彙集での排列順が特別の意図を持って変更されたと見られる場合もある。親族名称における父母、祖父母、曾祖父母という排列順を逆転させ、卵生動物と水鳥の部門の中位以下に置かれていた竜と鶴を昇格させて虫類、鳥類の筆頭としているのは本木の価値判断に基づくものであろう。

4.3 依拠資料の版

「類語大凡」の編集に用いられたEvans *A New Complete English and Dutch Grammar*の版は語彙集の見出し語の比較によって特定することができる。

まず、Evansの語学書の第3版までの版と第4版とでは少なからぬ見出し語に不一致がある。具体的には、語形の異なる見出し語や一方にのみある見出し語が存在する。そして、そのような場合、「類語大凡」の見出し語は第3版までの版のそれにほぼ一致する。

主な対応の型ごとに例を示せば表4の通りである。Evansの語彙集の見出しにある冠詞はここでは省く。現代と異なる綴りは古形の可能性があり、誤りであるとは限らない。

表4　Evans各版の語彙集と「類語大凡」の見出し語の対応1

E. Evans *A New Complete English and Dutch Grammar,* 'A Vocabulary'		『諳厄利亜興学小筌』「類語大凡」
第1版，第2版，第3版	第4版	
Gardiner（42, 44, 182頁）	gardener（167頁）	gardiner（巻之二、7a）
Penisle or Demi-Island（6, 8, 146頁）	peninsula or demi island（134頁）	penisle（巻之一、9a） demi-island（同上）
Fowler or Falconer（42, 44, 182頁）	fowler（167頁）	fowler（巻之二、6b） falconer（同上）
Dainty-dishes（19, 21, 159頁）	dainty or delicacy（146頁）	dainty dishes（巻之三、17b）
Pocket handkerchief（15, 17, 155頁）	なし	pocket hand kerchief（巻之三、15b）

これにより、依拠資料が第4版であった可能性は排除される。

第3版までの版における語彙集では版間の違いが小さいが、少数の見出し語に関して第3版への改版時に変更が加えられたり誤植が生じたりしている。そして、表5に見る通り、「類語大凡」の見出し語は第3版のそれに一致している。

表5　Evans各版の語彙集と「類語大凡」の見出し語の対応2

Evans *English and Dutch Grammar,* 'A Vocabulary'		『諳厄利亜興学小筌』「類語大凡」	備考
第2版	第3版		
Despight（28頁）	Despite（166頁）	despite（巻之三、34b）	名詞（"侮辱"）
Liquorish（55頁）	Liqorish（193頁）	liqorish（巻之三、22a）	liquorice, licoriceに同じ
Frankincense-tree（57頁）	Frankicense-tree（195頁）	frankicense-tree（巻之三、22a）	第3版と「類語大凡」は脱字
Pase（95頁）	Pasport, writ of leave（233頁）	pasport（巻之二、4b） writ of leave（同上）	

以上のことから、「類語大凡」の編集にはEvansの語学書の1792年に刊行された第3版が使われたと言うことができる。

ちなみに、「類語大凡」で目を引く次の奇妙な英語の3項目は依拠資料の版の問題に関わっている。

ホスピテル　ヲールト
hospital　old　　老院
ホスピテル　プール
hospital　poor　　貧院
ホスピテル　シッキ
hospital　sick　　病院　　（巻之一、16a）

これらは本来Evansの語彙集に'a hospital for {old/poor/sick} people'として挙

げられていた句から、forとpeopleの2語を書き漏らしてしまった結果である。当該の3句は第2版と第3版において図5のような体裁で示されている（‘65. Of a city’）。

図5　Evans語彙集のhospital関連表現（左: 第2版, 右: 第3版）

peopleが回転した形で配置されているために見落としが生じたと見られるのは両版に共通であるが、forの脱落はhospitalとforを2行に配置した第3版が使われたからこそ生じた誤りと考えることができる。

4.4 「平用成語」「学語集成」の依拠資料と編集

「平用成語」と「学語集成」についてはすでに依拠資料がほぼ満足の行く程度にまで解明されている。

筆者未見の山口（1996a，1996b）は、神沢（かんざわ）（2007）によれば、1800年ごろまでにオランダで刊行された英語学習書を調査し、「平用成語」「学語集成」の内容がWillem Sewel[7] *A Compendious Guide to the English Language*（オランダ語書名*Korte Wegwyzer der Engelsche Taale*）――以後*English Guide*と略記する――の1724年版か1735年版に限りなく近いとしている。そして、神沢（2011，2015）は「平用成語」「学語集成」の全文例を*English Guide*の1724年版と対照した結果を報告している。

*English Guide*は英語の発音や文法を解説した第1部、英蘭対訳の会話文例集を中心とする第2部、英蘭ないし蘭英対訳のアルファベット順の語彙集を内容とする第3部によって構成された英語学習書である。山口と神沢は、「平用成語」と「学語集成」の内容が*English Guide*の第2部、すなわち、‘The Second Part of the Guide to the English Language, Wherein Are Collected Several Dialogues, Letters and Bills of Exchange’の内容と密接な関係にあるとしている。

その観察は実際正しいが、「平用成語」「学語集成」の依拠資料が*English Guide*であったと言い切れるわけではない。それは、*English Guide*は元来それに先行して出版されたSewelのオランダ語学習書*A Compendious Guide to the Low-Dutch Language*（オランダ語書名*Korte Wegwyzer der Nederduytsche Taal*）―― *Dutch Guide*と略記する――に基づいて作られた英語学習書と見られるからである。[8] *Dutch Guide*はオランダ語の発音や文法を解説した第1部、英蘭対訳の会話文例集を中心とする第2部、英蘭対訳の語彙集である第3部によって構成されている。そして、第2部文例集の内容は*Dutch Guide*と*English Guide*とで共有されている――両書の文例集を共通に「Sewelの文例集」と呼ぶ――。山口は『興学小筌』が英語に関する著作であることから英語学習書だけを調べたのかも知れないが、*English Guide*だけでなく*Dutch Guide*も依拠資料の候補とする必要がある。

神沢は「平用成語」「学語集成」と*English Guide*第2部の文例の比較結果を逐一述べている。しかし、両者の内容の位置的な対応が分かる書き方になっていないので、筆者による確認と解釈を整理して表6に示す。頁数はかりに*Dutch Guide*の1725年版と*English Guide*の1724年版におけるものを示す。

表6 「平用成語」「学語集成」とSewel文例集の位置的な対応

『諳厄利亜興学小筌』「平用成語」「学語集成」			W. Sewel *A Compendious Guide to the Low-Dutch/English Language,* 'The Second Part, Dialogues'
巻之四	平用成語第一	1a～2b	A morning salutation between A B and B D, 2～3頁
		2b～5a	A farewel at the evening-time, between G and H, 4～5頁
		5a～6a（編集混乱）	To learn how to buy, and sell, 7頁 A dialogue between a merchant and his servants, 18～19頁
		6a～37a	Phrases between a governerss and a young gentlewoman, 97～111頁
巻之五	平用成語第二	1a～27a	Phrases between a governerss and a young gentlewoman, 111～123頁
		27b～33b	A dialogue between a merchant and his servants, 18～22頁
		33b～37b	To learn how to buy, and sell, 8～10頁
巻之六～巻之十	学語集成第一～学語集成第三十六		Dialogues bewtween two persons, The first dialogue ～ The thirty-sixth dialogue, 123～225頁

表6に見る通り、「平用成語」第一および第二はSewelの文例集の2～123頁の範囲から根拠不詳の方法で選ばれた内容を根拠不詳の順序に並べること

によって組み立てられている。「学語集成」の第一から第三十六は文例集の123頁以下に置かれた‘Dialogues between two persons’のうち‘The first dialogue’から‘The thirty-sixth dialogue’までをその順の通りに利用している。

「平用成語」「学語集成」はいずれも大多数の文例がSewelの文例集のそれに完全に一致する。中には若干の改変が加えられているものや、英語の綴りに誤りが生じているもの、また、新たに加えられた文例もあるが、*Dutch Guide*か*English Guide*を依拠資料としていることは疑いを容れない。

『興学小筌』とSewelの文例集の文例のあいだに見出される個々の差異については神沢に記述があるのでここでは省く。ただし、比較はさらに精密に行う余地がある。神沢は『興学小筌』と*English Guide*とで一致しない要素を列挙しているのであるが、不一致も事例によって『興学小筌』編集上の意味合いが異なり得る。すなわち、原本の誤りを訂正したもの、原本の正しい表現を誤写したもの、原本の表現を改めたものは区別して扱うのが望ましい。また、両書間で一致する要素でも、誤った表現をそれと気付かずそのまま借用したものは注目する価値があり得る。

神沢による不一致の確認には見落としも少なくない。例えば「学語集成」第三十六について言えば、神沢は（‘into’を‘in to’にするなどの語の分割以外に）計13件の不一致があると述べているが、それら以外にも少なくとも表7に示す6件の不一致がある。

表7　神沢の記述にないSewel *English Guide*と『興学小筌』の文例の不一致

The thirty-sixth dialogue	「学語集成」第三十六	不一致の種類
I must confess ...（213頁）	... confes ...（26a）	脱字
... the Vessel I was in, was in danger（213頁）	... the vessel i was in danger（26a）	2語脱落
in a glass of good Canary（215頁）	in a glass wine（28a）	誤った表現に変更
full of stores for Warr（218頁）	... wars（32b）	訂正目的の変更か
Alcad d’Alcassar（223頁）	... d’ alcasser（38a）	誤字
your Discours is so agreeable（224頁）	... discour ...（40a）	脱字

4.5　依拠資料の版

「平用成語」と「学語集成」の依拠資料は、筆者の確認できたものの中で言えば、*Dutch Guide*の1725年版か*English Guide*の1724年版のいずれかであると見られる。両書の文例集はほとんど同内容で、依拠資料の特定に役立つ違いを見出せていない。

版推定の主な根拠は次の通りである。

まず、Sewelの語学書の上記の版よりも古い版の文例集には、文例の表現などに『興学小筌』と異なるところがある。例えば、

> when will you go to see master ...?　汝は何頃某君を行て訪ふや
> i will see him this afternoon.　我午後行て彼を見ん　（巻之四、34a）
> how goes it with your health this morning.　汝が体状今朝如何
> Very well, a（ママ） your service.　汝に事ふるに甚快し　（巻之四、2a）

の下線部は*Dutch Guide* 1725年版と*English Guide* 1724年版の通りであるが、*Dutch Guide*の1700年版と1706年版および*English Guide*の1705年版ではそれぞれsee、afternoon、at your command（またはat your sarvis（ママ））になっている。

他方、より新しい版では、文例集の構成に目立つ違いがある。すなわち、*Dutch Guide*、*English Guide*の1720年代までの版においては「学語集成」の文例の出典とされた‘Dialogues between two persons’の‘The thirty-third dialogue’は‘Being in an inn’と題されたものであったが、神沢（2007）の記述にもある通り1740年以後の版ではその内容が‘Being in an inn’の標題とともに抜け落ち、以後の対話が1つずつ繰り上がるなどの変化が生じている。

以上のことから、「平用成語」と「学語集成」の依拠資料は、*Dutch Guide*の1725年版または*English Guide*の1724年版、さもなくば、その前後に出版された筆者未見の版――当該の2版に先行して出版されたと推定される現在未知の版（後の注11）や、山口（1996a, 1996b）が出典の候補の1つとする

English Guide 1735年版――であると考えられる。

なお、*Dutch Guide*と*English Guide*の出版をめぐっては注意すべき事情が2つある。第1に、両書はSewelの名を冠しているものの、第2部の文例集と第3部の語彙集はSewelの著作ではない。それらは事実上、1677年にオランダで出版された語学書Edward Richardson *Anglo-Belgica, The English and Netherdutch Academy*（オランダ語書名*Anglo-Belgica, d'Engelsche en Nederduytsche Academy*）――筆者が確認に用いたのは1689年版――の第2部、第3部の複製に過ぎない。[9] 実際、Sewelは*Dutch Guide* 1706年版の第1部の末尾で、"以下の文例集は有用だとは思うが、私が作ったものではないので質問には答えない"と断っている。[10] また、Sewelは1720年に没している。したがって、両書の内容へのSewelの関与は高々初期の版の第1部に限られることになる。

第2に、両書ともその諸版のあいだには一見奇妙な事実がある。それは、新しい版で旧版での文例が変更されても、さらに後に出た版では再び古い文例が使われている場合があるということである。これは、筆者の推定によれば、両書ともその諸版は一次元的な継承の関係になく、*Dutch Guide*について言えば図6に示すような分岐した系列を成していることによる。

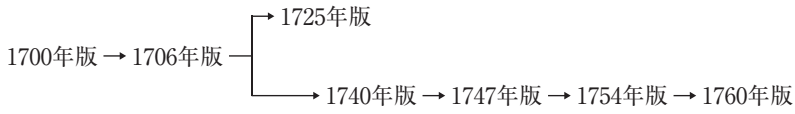


図6　Sewel *Dutch Guide* 諸版の継承関係

すなわち、1740年版は時間上直近の1725年版ではなく1706年版に基づく改訂版だということである。1725年版における表現の変更――上述のsee、afternoonからgo to see、this afternoonへの変更など――が1740年以後の版に反映されていないという事実は、そう考えて初めて説明が付く。[11] *English Guide*についても筆者の確認できた版の限りにおいて同様の関係が成り立つ。

4.6 『興学小筌』凡例の再解釈

『興学小筌』巻之一巻頭の凡例において本木正栄は、同書の作成に50年前に先人――先行研究は一致してこれがその父本木良永（よしなが）（栄之進）を指すとする――が書写して残した「和蘭の学語を集成したる書」を用いたと説明している。会話文例集の「平用成語」と「学語集成」がSewelの語学書――正確に言えば、Sewelの名を冠して出版された語学書――の写本に頼って著されたことを意味すると解釈し得るその記述については差し当たり明確な疑義はない。

しかし、語彙集の「類語大凡」に関する本木の説明は控え目に言っても紛らわしい。本木は「書中解し易き類語を抄出し、傍に音釈の仮名を加へ毎語訳字を附す」と述べ、唐突に言及された「書」が何を指すかを明らかにしていない。そのため、読み手に文脈上、「平用成語」「学語集成」の文例集から基礎的な語句を抜き出したとも思わせる書きぶりになっている。実際、渡辺（1982）は本木に誘導されるままにその解釈に陥っている。しかし、もはや言うまでもなく、「類語大凡」は会話文例集あるいはその他の英語の文章から語句を抜き出すことによって作られたものではない。おそらく意図的に曖昧に書かれたものであろう「書中解し易き類語を抄出し」という本木の説明を、我々は“Evansの語学書の類別語彙集から平易な語句を選び出した”という意味に理解しなければならない。

5.『諳厄利亜語林大成』

『諳厄利亜語林大成』の調査にも基本的に日本英学資料刊行会によって複製、刊行された作者自身による草稿本を用いる。

5.1 『語林大成』の概要

『語林大成』は項目がアルファベット順に並べられた英和対訳の語彙集、

辞書で、15巻より成る。

凡例の末尾には本木正栄を筆頭とするオランダ通詞5名の名が記されている。英和の語彙集、辞書ではあるが、草稿では日本語訳の付与に利用されたと見られるオランダ語訳がほぼすべての項目に朱筆で書き添えられている。

5.2 『語林大成』の依拠資料と編集

筆者の見るところでは、『語林大成』の編集作業は相当複雑なものであった。単に英蘭対訳の語彙集のオランダ語を日本語に訳すというような作業ではなかったはずである。諸々の要素が錯綜して状況は複雑であるが、筆者の粗い分析によれば、『語林大成』は主として3つの出典に挙げられた語句の大多数を集めてアルファベット順に排列することによって作られたと推定される。

編集に使われた依拠資料の1つはSewelの語学書*Dutch Guide*ないし*English Guide*であり、その第3部、'The Third Part of the Compendious Guide, Containing a Small Vocabulary'が使われた。これは英蘭ないし蘭英対訳のアルファベット順語彙集である。[12)]

『語林大成』がSewelの語彙集に依拠していることは、例えば次のような複合的な項目の共通の存在から確かめられる。句読点の有無は原文の通りである。

Ago or past Verleden, geleden. （Sewel語彙集）
ago（エゴ）, 又 *past*（パスト）. verleden, geleden 経（へ）タリ （『語林大成』）
a *Fair*（or *market*） een jaarmarkt. （Sewel語彙集）
Fair（ヘイル） 又 market（マルケット） jaarmarkt. 時価市 （『語林大成』）

第2の依拠資料は、『興学小筌』の「類語大凡」の編集にも使われたEvans *A New Complete English and Dutch Grammar*であり、その類別語彙集が使われた（4.2）。

『語林大成』がEvansの語彙集をも依拠資料としていることは、辞書や語

彙集が見出しとして挙げることのあまりない次のような語句を両書がともに見出しとしていることから知られる。

to be able, to be silent, to be wet（be＋形容詞）
to be banished, to be beaten, to be grieved（受動態）
to desire earnestly, to drive away, to walk abroad（動詞＋副詞）

そして、第3の依拠資料は『興学小筌』である。その語彙集である「類語大凡」だけでなく文例集の「平用成語」と「学語集成」も使われている。

まず、「類語大凡」について言えば、「類語大凡」と、それが依拠しているEvansの語彙集に挙げられた語句の範囲は一致しない。すなわち、Evansの語彙集にあって「類語大凡」には収められなかった語句もあれば、語彙集にはなく「類語大凡」で独自に加えられた語句もある。上掲の‘to be able’その他は『語林大成』に挙げられた前者の類の語句の例である。後者の類の語句はそのほとんどが『語林大成』に引き継がれている。例えば、次のようなものがある。

united Nether land（ユニテット ネーデル レンツ）　業謁埒爾蘭杜（ネ エ デ ルラント）七州一致総称
Japan（ゼャッペン）　大日本　（『興学小筌』巻之一、19b）
one time as much（ワン テイム アス モ ツ）　一倍　（同巻之一、29b）

最後の「一倍」は、Evansの語彙集の倍数表現の部門（‘93. Proportional numbers’）にsingle、double、triple、quadruple、six times as much、seven times as much、hundred times as muchが挙げられているのを受けて「類語大凡」で「二倍」「三倍」「四倍」「五倍」とともに補充されたものである。

『語林大成』には「平用成語」と「学語集成」の文例中に現れる語も、固有名詞を除くそのほとんどすべてが項目として立てられている。SewelやEvansの語彙集にはない一般性の低い語が挙げられ、また、例えば動詞が

しばしば原形でなく過去形や現在分詞、過去分詞の形で見出し語とされているのはそのことによる。本木らは『語林大成』の編集において、『興学小筌』の文例の解釈に必要な語彙情報をすべて提供することを目指したのであろう。

なお、SewelとEvansの語彙集に共通して現れる語句は『語林大成』では多くの場合1項目に統合されている。その際、SewelとEvansとでオランダ語訳が異なる場合に、草稿における朱筆のオランダ語訳が両方の訳の総和になっている事例は分かりやすい。例えば、動詞digはSewelではdelven、Evansではgraavenと訳されているが、草稿には'delven, graaven'のように記されている。しかし、実際の状況は複雑で、複数ある訳語の一部が省かれたり、新たな訳語が付け加えられたりしていることも多い。訳語がSewelとEvansのいずれにも一致しない場合もある。訳語の問題は本小論の対象とする範囲を超えるが、本木たちは、正確な日本語訳を提供するために、依拠資料中のオランダ語訳だけに頼るという安直な方法によらず、各種の辞書で調べたり[13]英語教師役のオランダ人に尋ねたりして訳語を吟味、調整するという手間のかかる作業に取り組んだものと考えられる。

5.3 依拠資料の版

『語林大成』の編集に使われたEvans *A New Complete English and Dutch Grammar*の版については『興学小筌』「類語大凡」のところで述べたことがそのまま該当する（4.3）。

これに対して、Sewelの語学書*Dutch Guide*ないし*English Guide*の版の解明は容易な課題ではない。本木らは出典の内容をそのまま使っているわけではなく、英語の綴りにもオランダ語訳にも広範な調整を施している。その結果として、『語林大成』とSewelの語学書の諸版における語彙集の内容の対応は複雑を極めている。そもそもSewelの語学書に基づく記述の範囲がはっきりしているわけでもない。

しかし、『語林大成』と*Dutch Guide*、*English Guide*の諸版の内容を比較す

ると、いろいろなことが見えてくる。以下に、部分的な観察に基づく分析と推定を述べる。議論の単純化のために、差し当たり *Dutch Guide* が依拠資料とされたと仮定して述べる。

まず、使われたのが1754年までの版であることは2点の事実から確かめられる。その第1は『語林大成』の次の2項目に関わる。下線は説明の便宜上ここで加えたものである。

To account, accompt, 亦 Esteem. Achten. 重スル、尊重スル
Account. Reekening. 会計

これらの項目に対応する *Dutch Guide* 諸版の記述は次の通りである。

1706年版、1725年版、1740年版、1747年版、1754年版：

to *Account, Accompt*, or *esteem* Achten.

an *Account* een Ree(c)kening.[14)]

1760年版、1783年版：

to *Account*, or *esteem* Achten.[15)]

an *Account, Accompt* een Rekening.

すなわち、accompt（accountの古形）が1754年までの版では『語林大成』と同じく動詞として挙げられているが、1760年以後の版では名詞の項目に移されている。

『語林大成』における名詞accountのオランダ語訳reekeningは *Dutch Guide* の一部の版における綴りにのみ一致するが、それは版の特定の決め手にはならない。『興学小筌』でも『語林大成』でもしばしば原本における英語、オランダ語の綴りが変更ないし誤写されており、個別的な綴りは概して証拠能力を持たないからである。

第2に、1754年までの版に挙げられていた否定接頭辞un-を持つ形容詞の

うち次に示す18語は1760年以後の版では省かれ、うち17語は接頭辞をin-やdis-に変えたうえで当該の位置に移されているのであるが、『語林大成』にはこれらがすべて挙げられている。

uncapable, unconstant, undiscreet, unestimable, unfallible, unhonest, unmovable, unorderly, unpatient, unperceivable, unperfect, unpossible, unpregnable, unsatiable, unsensible, unshamefaced, unsufferable, unsupportable

したがって、『語林大成』の依拠資料とされた*Dutch Guide*は確実に1754年までの版であると言える。

英語の綴りの観点からの考察によって版の範囲をもう少し狭め得る可能性がある。それは語末の綴り-ieと-yの交替に関わる。すなわち、『語林大成』と*Dutch Guide*の1747年以後の版では例えばauthority、baby、companyのように綴られている語が、1740年までの版ではauthoritie、babie、companieと綴られているという事例が多数ある。松田（2017）はこのことに基づいて、『語林大成』が*Dutch Guide*の1760年版に基づいて作られたと解釈している。上述の理由によりその可能性はもはや考えがたいのであるが、いずれにせよ、『語林大成』の綴りは調整を経ているので、一部の事例だけを見て即断することはできない。

『語林大成』における当該の語末の綴りを広く観察すると、上記の語例のように-yが使われて*Dutch Guide*の新しい版にのみ一致する語がある一方で、-ieが使われて1740年までの古い版にのみ一致する語もあることが分かる。例えば、現代のfly、livery、studyはflie、liverie、studieと綴られている。この両面性をどう理解すればよいのか。本木らが新旧の――と言っても、ともに半世紀以上前に出版された古い――2つの版を併用したという可能性は少々考えがたい。かりに手中に*Dutch Guide*の2つの版があったとしてもより古いほうを併用する意味は乏しかったと思われるからである。単一の版が使われたとすれば、本木らが新しい版を使いながら一部の語の綴りをわざわ

ざ古いものに戻したということは考えにくい。逆に、古い版を使って古い綴りは当代風に書き換えたのだが一部の語については不注意ないし何らかの判断により変更が行われなかったとする解釈のほうが自然である。

実際、本木らに-yの綴りを優先させる考えがあったことの反映と見得る事例が存在する。「To（ト） ly（レイ） 休フ[16] 宿ス 又居家スルヲ云」に含まれる動詞は*Dutch Guide*のすべての版の語彙集において現代と同じlieの綴りで記されているが、それにもかかわらず『語林大成』ではそれを採らず、lyとしている。また、名詞の「lye（レイエ） 訛言」も*Dutch Guide*では一貫して現代と同じくlieと綴られている。本木らは-ieを含むlieを古い綴りと考えて採用を避けたもののようにも思われる。[17]

以上の推定が正しければ、『語林大成』の編集に使われたSewelの*Dutch Guide*は1740年までの版――既知の版で言えば、1700年、1706年、1725年、1740年のいずれかの版――であったことになる。

版の範囲をさらに狭めることはむずかしい。状況が複雑で、依拠資料がどの版であったと見ても不都合な要素が残るからである。強いて言えば、既知の版の範囲では初期の1706年版が使われた可能性が相対的に高いように思われる。同版ではlength、partitionの2語がlenght、particionと記され、それらの誤りは『語林大成』に共通し、*Dutch Guide*の他の版には見られないなどの事実があるからである。しかし、『語林大成』の見出し語の綴りが1706年版にのみ一致しない事例も少なくとも20件余りある――もっとも、同版は誤植が多く、それらは本木らによる訂正の結果と解釈できないわけではなく、また、すべての事例がSewelの語彙集から取られているとも限らない――。筆者は総合的に考えて、依拠資料とされたのはむしろ1706年以後に出版された未知の版であったのではないかと憶測する。すなわち、その版では1706年の語彙集の誤植の多くが訂正されたがlenghtとparticionの誤りは残ったと考えるということである。[18]

依拠資料が未知の版であれば問題の完全な解決は望めないことになるが、いずれにせよさらに綿密な分析の余地は残っている。『語林大成』草稿に記

されたオランダ語訳を詳しく検討すれば版の考察に役立つ情報が得られる可能性がある。また、ここでは*Dutch Guide*に基づいて考察したが、*English Guide*の初期の版の英蘭対訳の語彙集は*Dutch Guide*のそれと完全に、ないし、ほとんど一致する。そして、*English Guide*の後の版における蘭英対訳の語彙集も無視することはできない。従来しばしば『語林大成』の依拠資料は英蘭対訳の辞書、語彙集だと言われてきたが、その想像はやや素朴に過ぎる。なぜならば、蘭英対訳の辞書、語彙集を本木らが英蘭対訳の形に仕立て直したことも考え得るからである。実際*Dutch Guide*の英蘭語彙集を*English Guide*の蘭英語彙集に作り替える際にはその変換、すなわち、項目の並べ替えが行われているのであり、[19]本木らが『語林大成』編集に際して行った作業の全体からすればその変換はさしたる負担でもなかったはずである。

６．依拠資料判明のもたらす理解と新たな謎

英語研究書の依拠資料が分かって初めて見えてくることもある。次に示すのは『興学小筌』「類語大凡」の末尾（巻之三、38b～39a）に挙げられた11件の語句である。

レルン learn.	習学	レテュリュン leathern.	習学
リート Read.	読誦	ランゲース language.	言辞
ウヲルト Word.	言語	デュッツ[20] ランゲース Duch language.	和蘭語
エンギリス ランゲース English language.	諳厄利亜語	ディリゼン Diligent.	勉励
エキセルセイス Exercise.	脩業	コンテントメント Contentment.	満足
コンゲレテュレーシン Congratulation.	祝賀		

これらは本木がEvansの語彙集によらず独自に増補した語句であり、つなぎ合わせると読者に宛てられたメッセージ風のものとして読めるようになっている。想定された読者は明らかに幕府の役人ではなく後進の英語学習者である。

また、この増補からは本木が辞書を用いて著作に取り組んでいた様子も浮かんでくる。learnの同義語として挙げられたleathernは“革製の”という意味の形容詞であり、「習学」とは無縁である。オランダ語の両義的なlerenに対して蘭英辞典がlearnとleathernという2つの訳語を示していたなどの事情の結果として、誤った語が挙げられてしまったのであろう。[21)]

しかし、依拠資料の判明の結果として新たに生じてくる謎もある。第1に、本木が『興学小筌』の「類語大凡」の編集にEvans *A New Complete English and Dutch Grammar*を使ったのであれば、なぜ文例集の編集にはEvansの同書に含まれる文例集（3.2）を使わず、わざわざ“50年前に先人が書写して残した”（4.6）古い――そして手書きで判読しにくいはずの――文例集に頼って「平用成語」と「学語集成」を編んだのか。『言語和解』との重複を避けるためだったという可能性は考え得るが、そうであったのか。第2に、本木は『語林大成』の編集に使ったSewelの*Dutch Guide*ないし*English Guide*をいつ入手したのか。もしそれが当初から本木の手中にあったのであれば、「平用成語」と「学語集成」の編集に先人の写本を使う必要はなかったはずである。とすれば、『興学小筌』を仕上げてから『語林大成』の編集に着手するまでの短期間のあいだに百年も前のSewelの語学書を入手したことになるが、そうであったのか。それとも、Sewelの語彙集も写本によったのか。あるいはまた、先人の写本を使ったという説明が実は偽りであったのか。

本木は『興学小筌』でも『語林大成』でも依拠資料について明確に語ることを避けている。もしここで述べてきた両書の依拠資料に関する個々の推定自体が基本的に正しいとしても、依拠資料の入手を含む両書の編集過程全体に関する整合的な理解を達成するためには上述のような疑問の解決が必要である。

7．おわりに

日本最初期の英語研究書である『諳厄利亜言語和解』『諳厄利亜興学小筌』

『諳厄利亜語林大成』の編集の内容、方法を主としてそれぞれの依拠資料とその版の観点から考察し、筆者の推定するところを述べた。今後の研究を通じて誤りが正され、不足が補われることによって、それらの英語研究書の成立に関する理解がより正確なものとなることを期待したい。

［注］

1）「電」の読みはイナビカリか。『語林大成』には「lichten 電（イナヅマ）」「lichtning 疾電（イナビカリ）」という記述がある。lichten、lichtningはlighten、lightningの誤りである。

2）19世紀初頭までに出版されたオランダの各種語学書の書誌情報についてはScheurweghs（1960）に詳細な記述がある。また、Scheurweghsの記述に漏れた版などに関する情報がAlston（1964, 1967）から得られる。

3）『言語和解』の作者が第4版を使い、beginをbeginsと誤写したということも考え得る。しかし、発音が「ベキンス」と記されていること、および、ほかの文例の状態から考えて、原文もbeginsであった可能性が高いと判断した。

4）『諳厄利亜興学小筌』は書名が一貫せず、原本の題箋と内題には『諳厄利亜国語和解』『諳厄利亜興学』などと書かれている。『諳厄利亜興学小筌』は同書の凡例で使われている書名である。詳しくは井田（1982a）を参照。

　なお、『諳厄利亜興学小筌』は3冊に分けて綴じられており、原本第3冊の題箋には誤って『諳厄利亜語林大成』と記され、「大成」の2字だけが朱筆で「和解」と訂正されている。題箋はおそらく『諳厄利亜語林大成』成稿後に書かれたものと推定される。

5）正確に言えば、「類語大凡」にはEvansの語学書の第2部‘Second Part of the English and Dutch Grammar’に含まれる英蘭対訳の会話文例集‘Familiar Phrases’からも少数の語句が取られている。しかし、記述の簡潔のために出典は語彙集であると単純に表現する。

6）「18a」は第18葉表を表す（葉の表裏をa、bで表す）。ただし、『興学小筌』に葉数の表示はなく、ここで示す葉数は実際に数えた結果である。

7）Willem Sewelの姓の発音は不詳である。日本の文献では「セウェル」「セーウェル」「シューアル」などと記されている。Smith（1991）は“Sewelの祖父は英国人だが自身をオランダ人と見なしていたので一家はおそらく［seːʊl］のように名乗っていた”と述べている。それが正しければ「セーウル」という表記が近いことになる。

8）*English Guide*が*Dutch Guide*を基礎とするとの見方は、Scheurweghs（1960）における両書の各版の出版年の記述その他に基づく筆者の推定による。

両書ともに多数の版がある。そして、*Dutch Guide*では版数が表示されているが、内容が異なっていても版数が同じであったり、新しい版の版数が小さくなっていたりするので、版の区別は版数ではなく出版年によって行う必要がある。*English Guide*には基本的に版数の表示がない。

9）そして、*Anglo-Belgica*の文例集の内容は、1653年に英国で出版され以後版を重ねたClaude Maugerのフランス語文法書——筆者が参照できたのは1676年の*Claudius Mauger's French Grammar with Additions* 第8版——に収められた仏英対訳の文例集に大きく重なる。また、それらの文例集に含まれる対話の一部は1646年にオランダで出版された著者不明の*The English Schole-Master*や1664年にオランダで出版されたFrancois Hillenius *The English and Low-Dutch Instructer*(ママ)中にも見出される。

10）この断り書きは以後の版の*Dutch Guide*にも引き継がれている。*Dutch Guide*に基づく派生的な著作と見られる*English Guide*には断り書きはない。

11）実際のところはさらに複雑で、本文でDutch Guideの第2部文例集に基づいて述べた版間の継承関係は第3部の語彙集には当てはまらない。すなわち、1740年版の語彙集は1706年版ではなく1725年版のそれを使っているように見えるのである。

それもまた不可解なことであるが、1706年版と1725年版のあいだに未知の別の版が存在していたと仮定すれば矛盾が解消する。すなわち、その版では1706年版の語彙集が更新されており、1725年版と1740年版はその版から分岐したと見るということである。

なお、第1部の内容は1706年版から1760年版に至るまで基本的に共通である。

12）*Dutch Guide*の語彙集は一貫して英蘭対訳である。*English Guide*の語彙集は、初期の版（1705年版、1706年版）では英蘭対訳、1724年以後の版では蘭英対訳である（筆者未見の1706年版についてはScheurweghs（1960）の記述による）。おそらく*English Guide*の初期の版では*Dutch Guide*の語彙集が流用されていたということであろう。

13）巻頭の「諳厄利亜語林大成叙」では、「傍ら参考するに和蘭の書を以てし、猶其疑きものは払郎察(フランス)の語書を以て覆訳再訂し」たと説明されている。

14）1740年までの版ではreeckening、1747年と1754年の版ではreekeningである。

15）1783年版では*esteem*は*Esteem*と書かれ、オランダ語訳achtenは欠落している。

16）読みは「いこふ」か。

17）動詞のlyは『興学小筌』「学語集成」の文例中（巻之十、7b）、名詞のlyeはEvansの語彙集（'22. Of capital crimes'）に出て来る。『語林大成』では現代の綴りに一致

するSewelの語彙集よりもそれらを優先した形になっている。

18）さらに憶測を重ねた推定によれば、ここに言う未知の版は注11で述べた未知の版に先行する版であり――すなわち、未知の版が2つ存在した――、前者に残ったlenghtとparticionの誤りも後者では訂正されていた。

19）英蘭対訳から蘭英対訳への変換はしばしば単純な位置の入れ替えによって行われている。例えば、*'Ago or past* Verleden, geleden.'という項目を'Verleden, geleden. *Ago or past*'とするがごとくである。少なくともそのような場合については、『語林大成』の編集に英蘭対訳と蘭英対訳のいずれの語彙集を使っても同等の結果が得られたことになる。

20）Duchは「類語大凡」における綴りの通りである。「平用成語」「学語集成」『語林大成』では正しくDutchと書かれている。

21）依拠資料の判明を受けて『興学小筌』『語林大成』に関する従来の論述に見直しが必要となるものがいくつもあるが、ここではそのことを一般論として記すにとどめる。

［文献］

井田好治（1971）「長崎におけるオランダ商館員と蘭通詞による英学の移入」緒方富雄編『蘭学と日本文化』（東京大学出版会）

井田好治（1982a）「長崎本『諳厄利亜興学小筌』の考察」日本英学史料刊行会編『長崎原本「諳厄利亜興学小筌」「諳厄利亜語林大成」研究と解説』（大修館書店）

井田好治（1982b）「長崎本『諳厄利亜語林大成』の考察」同上

岩崎克己（1941）「徳川時代に於ける英語辞書の舶載」『書物展望』第13巻第3号（書物展望社）

勝俣銓吉郎（1936）『日本英学小史』（研究社）

神沢芳賢（2007）「『諳厄利亜興学小筌』『諳厄利亜語林大成』の底本について」『日本英学史学会九州支部発足30周年記念誌』（日本英学史学会九州支部）

神沢芳賢（2011）「『諳厄利亜興学小筌』の底本（1）」『九州産業大学国際文化学部紀要』第48号

神沢芳賢（2015）「『諳厄利亜興学小筌』の底本（2）」『九州産業大学国際文化学部紀要』第60号

新村出（1922）「日英関係図書展観志（上）」『芸文』第13年第6号（京都文学会）

杉本つとむ（1978）『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅲ―対訳語彙集および辞典の研究―』（早稲田大学出版部）

杉本つとむ（1981）『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅳ―蘭語研究における人的要

素に関する研究―』(早稲田大学出版部)
竹村覚(1933)『日本英学発達史』(研究社)
竹村覚(1934)『日本英学史』(英語英文学刊行会)
松田清(2017)「吉雄権之助訳蘭英漢対訳辞典の編纂法について」内田慶市編『周縁アプローチによる東西言語文化接触の研究とアーカイヴスの構築』(ユニウス)
南出康世(1991)「解題編 英学資料 第3章 辞書」大阪女子大学附属図書館編『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』(大阪女子大学)
山口純男(1996a)「『諳厄利亜興学小筌』と『諳厄利亜語林大成』の底本について(1)」日本英学史学会関西支部第32回大会口頭発表資料[筆者未見。神沢(2007)における引用を通じて参照。]
山口純男(1996b)「Willem Sewel『*Korte Wegwyzer der Engelsche Taale*』の調査報告(2)」日本英学史学会関西支部第6回研究会口頭発表資料[同上。]
渡辺実(1959)「幕府の英仏独語研究の展開」『人文』第10集(京都大学教養部)
渡辺実(1967)「『諳厄利亜語林大成』編訳次第」山田忠雄編『本邦辞書史論叢』(三省堂)
渡辺実(1982)「英語習学の方法と論理―『諳厄利亜語林大成』の誕生まで―」日本英学史料刊行会編『長崎原本「諳厄利亜興学小筌」「諳厄利亜語林大成」研究と解説』(大修館書店)
Alston, Robin Carfrae(1964) 'English grammars in Dutch and Dutch grammars in English: A Supplement', *English Studies*, Vol. 45, No. 5.
Alston, Robin Carfrae(1967) *A Bibliography of the English Language from the Invention of Printing to the Year 1800*, Volume Two: *Polyglot Dictionaries and Grammars*, Bradford: Ernest Cummins.
Scheurweghs, Gustave(1960) 'English grammars in Dutch and Dutch grammars in English in the Netherlands before 1800', *English Studies*, Vol. 41, No. 3.
Smith, Robin(1991) 'Dyche and Sewel as teachers of English', Ingrid Tieken-Boon van Ostade and John Frankis(eds.) *Language Usage and Description: Studies Presented to N. E. Osselton on the Occasion of His Retirement*, Amsterdam: Rodopi.

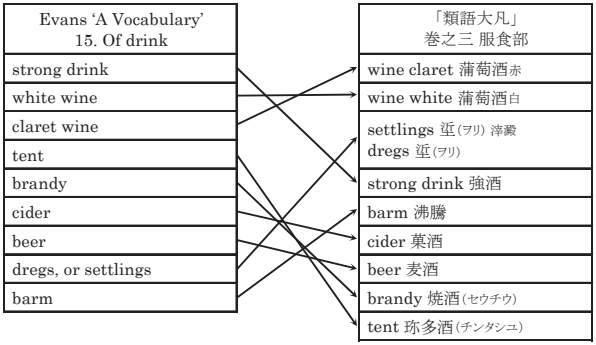
追記1 『諳厄利亜言語和解』の依拠資料に関する従来の記述について(3.2)

再校後に気付いたところによれば、ほかに杉本つとむ『日本英語文化史の研究』(八坂書房、1985年)が「何かテキストがあったかどうかはっきりしない。講師であるブロムホフが通詞のために考案作成したか。」と述べていた。「ブロムホフ」はオランダ通詞たちに英語を教えた出島オランダ商館長ヤン・コック・ブロムホフ(Jan Cock Blomhoff)を指す。

追記２　『諳厄利亜興学小筌』「類語大凡」における語句の排列順について（4.2）

2017 年 12 月 8 日に開かれた関西大学東西学術研究所の 2017 年度第 14 回研究例会（言語接触研究班）で本稿の概要を発表した際、沈国威、木津祐子各氏より「類語大凡」におけるbread関連表現の排列順は訳語の字数や意味に基づいている可能性があるとのご指摘をいただいた。訳語に注意を払うことなく選んだ当の例は確かにそうした観点から排列順に一定範囲の説明が付き、その意味で適例ではなかった。

「類語大凡」における語句の排列順に根拠を見出しがたいより適切な事例としては、例えば酒に関する表現における次の対応を挙げることができる（巻之三、20b）。訳語の振り仮名は作図の都合上括弧で囲んで後置する。また、この例では両書とも他方の当該箇所にない語句を含んでおり、それらは省いて示す。



訳語を考慮に入れれば、“Evansの語彙集で１項目にまとめて挙げられた複数の類義語は同一の紙片に書き取られた”という推定も再確認を要することになる。類義語が別々の紙片に書かれたとしても、訳語を参考にして語句を排列すれば、類義語は隣接して置かれることになるからである。しかしながら、本文で述べたようにEvansの語彙集での類義語の記載順がほぼ確実に保存されているという事実もあり――上例の‘dregs, or settlings’は例外的に順序が変わった稀な例である――、そのことはやはり上述の推定によるほうが自然に説明が付く。「類語大凡」の語句は複雑に再分類され（表３）、かつ、部門内で並べ替えられており、その作業の中で、別々の紙片に書かれた類義語の順序を保つことは（Evansでの記載順を書き添えるなどの手立てを講じない限り）困難だったはずである。

（文学研究科教授）

SUMMARY

The Sources and Compilation of the Earliest Japanese Treatises on the English Language

Tadaharu TANOMURA

The English language became an object of study in Japan for the first time at the outset of the nineteenth century, when the Tokugawa shogunate issued an order that designated interpreters of Dutch study English.

In a considerably short period of time, the following three works were completed and submitted to the authorities.

1) *Angeria Gongo Wage* (1810-1811, the 7-8th years of *Bunka*)
2) *Angeria Kōgaku Syōsen* (1811, the 8th year of *Bunka*)
3) *Angeria Gorin Taisei* (1814, the 11th year of *Bunka*)

A number of theories have hitherto been published with regard to the sources of these works, but without much success except in a small number of cases in recent years.

This article, by way of a detailed analysis and comparison of the three works and different editions of several language primers published in Europe in the eighteenth century, will attempt to clarify what materials the authors of those works drew upon, and how they compiled the materials into their works.